

高大接続改革を追う ▶▶ 第11回

今回の「高大接続改革を追う」では、2017年秋以降の動きをまとめている。さまざまな動きがあったが、主として、①大学入学共通テストの導入に向けた2017年度試行調査（プレテスト）の概要、②大学入試英語成績提供システム、③国立大学協会の基本方針、④高校生のための学びの基礎診断についてまとめた。なお、①の試行調査（プレテスト）の問題分析は、河合塾ホームページにすでに掲載している。合わせてご参照ください。

数学、国語、地歴・公民、理科、英語について 2017年度試行調査（プレテスト）実施

2017年11月と、2018年2～3月に、2017年度の「大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）」（以下、試行調査）が、2回に分けて実施された。

11月は、参加高校・中等教育学校（以下、高校等）がその期間内の任意の日時において高校等で実施した。高校等によって実施科目は異なる。地域バランス等も配慮され、全高校・中等教育学校の約4割にあたる、1,889校が参加した。

英語の試行調査は、2018年2～3月に実施された。試行調査には、全高校・中等教育学校の約3%にあたる158校が参加した。

教科・科目・受検学年は<表1>にあるとおりで、2018年3月に公表された速報値（英語）と11月の実施分の結果報告に基づいている^(注1)。

大学入学共通テストの出題教科・科目のうち、地理歴史のA科目、公民の「倫理」「政治・経済」、理科の基礎科目は、今回の試行調査では実施されなかった^(注2)が、それ以外の教科・科目は実施された。試験時間は、国語はマークシート式・記述式合わせて、現行の大学入試セ

<表1> 試行調査の実施科目、受検者数及びマーク式問題の答案読取状況等

教科名	科目名・実施内容	試験時間	受検者数	受検対象者	
国語	国語	100分	64,500	高校2年生以上	
数学①	数学Ⅰ・数学A	70分	53,664		
数学②	数学Ⅱ・数学B	60分	15,950		
地理歴史	世界史B	各60分	6,335	原則 高校3年生	
	日本史B		8,238		
	地理B		4,843		
公民	現代社会	60分	5,145		
理科	物理	各60分	6,106		
	化学		7,028		
	生物		5,110		
	地学		709		
外国語科 英語	筆記（リーディング）	80分	6,281		高校2年生
	リスニング（バージョンA）	30分	3,132		
	リスニング（バージョンB）	30分	3,154		

- ・大学入試センターが公表した資料（2018年3月14日、26日）に基づき、平成29年11月実施分と平成30年2月実施分をまとめて編集部で作成。
- ・英語の受検者数は3月8日時点の数字。

(注1) 2018年3月26日に2018年11月実施分の試行調査の結果が公表されたため、PDFの記事では<表1>と<表2>の数値を変更した。

(注2) 今回実施されなかった教科・科目等については、大学入試センターにて検証が必要な事項を精査し、2018年11月実施予定の試行調査にて必要な検証を行う予定。

<表2> 【国語】問題のねらい・正答率（速報値）

		解答 番号	問題のねらい	正答率 (%)
第1問	問1	1	現代の社会生活で必要とされる実用的な文章のうち、高校生にとって身近な「生徒会規約（部活動規約）」等を題材としている。それらを踏まえて話し合う言語活動の場を設定し、複数の資料を用いることにより、テキストを場面の中での確に読み取る力、及び設問中の条件として示された目的等に応じて思考したことを表現する力を問う。	【記述式】 のため 未発表
	問2	2		
	問3	3		
第2問	問1	1	図表や写真が含まれた論理的な文章を題材としている。図表や写真と文章とを関連付けながら、構成や展開をとらえるなど、テキストを的確に読み取る力を問うとともに、設問中に示された条件に応じて考えを深め、テキストの内容と結び付く情報とそれらの適切な論理の展開を判断する力を問う。	53.6
		2		32.0
	問2	3		61.8
	問3	4		19.2
	問4	5		35.8
問5	6	44.8		
第3問	問1	1	文学作品（「幸福な王子」）を踏まえて創られた小説を題材としている。本文に即して登場人物の心情や言動の意味をとらえるなど、テキストを的確に読み取る力を問うとともに、文章に示された原作のあらすじと創作された内容との比較を通して、文学的な文章における構成や表現の工夫を読み取る力を問う。	66.6
		2		58.2
		3		43.2
	問2	4		80.8
	問3	5・6		24.8
	問4	7		19.0
		8		42.5
	問5	9		36.9
		10		50.3
	第4問	問1		1
問2		2	22.6	
問3		3	30.5	
問4		4	20.5	
問5		5	22.7	
問6		6	29.1	
第5問	問1	1	漢文を題材として提示するだけでなく、生徒の言語活動の場面を想定し、関連する漢詩やその説明などからなる文章を題材とすることで、複数のテキストを比較することを通して、登場人物の心情や言動の意味等をとらえ、漢文を的確に理解する力を問う。	77.0
		2		64.6
	問2	3		12.6
		4		26.1
	問3	5		30.3
	問4	6		41.5
	問5	7		14.7
問6	8・9	22.5		
問7	10	33.0		

・大学入試センター「大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）の結果報告（2017年11月実施分）」（2018年3月26日）より

ンター試験（以下、センター試験）より20分長い100分、数学I・数学Aは、センター試験より10分長い70分であった。

**記述式問題も出題
マークシート式問題では
新たな出題形式も**

まず、今回の試行調査の問題のねらいと形式について見てみると、記述式問題については、国語は、小問3問で構成された大問1題が出題された。小問の解答字数は、25字以内、50字以内、80～120字以内がそれぞれ1問ずつである。数学は、マークシート式と混在させた形で出題され、数式を記述する問題、問題解決のための方略を短文で記述する問題など、小問3問が出題された。

マークシート式問題では、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視した出題の工夫・改善がなされている。さらに新たな出題形式として、当てはまる選択肢を全て選択させる問題、解答が前問の解答と連動する問題や、解なしの選択肢を解答させる問題などが出題されている。

英語では、英語の資格・検定試験活用に関する方針も踏まえながら、「読むこと」「聞くこと」の能力をバランスよく把握するため、筆記（リーディング。マーク式）、リスニング（マーク式）が出題された。いずれもヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、A1からB1まで^(注3)の問題を組み合わせ出題された。実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、目的、状況の設定が重視されたが、「筆記（リーディング）」では「読むこと」の把握を目的としたため、

発音、アクセント、語句整序などの問題は出題されていない。

リスニングでは、複数の情報を比較して判断する力や議論を聞いて要点を把握する力等を問うことがそのねらいとされた。読み上げる音声は、アメリカ英語だけでなく、イギリス人や、英語を母語としない人による読み上げも行われた。読み上げ回数は、今後の検証のため、受検者を全て2回読むグループ、1回と2回が混在するグルー

(注3) CEFRには、基礎段階の言語使用者（A1とA2）、自立した言語使用者（B1とB2）、熟練した言語使用者（C1とC2）の6段階ある。

ブに分けて実施し、その結果を比較する予定である。また、当てはまる選択肢を全て選択させる問題も出題された。

学習指導要領との関係

問題で問われる知識・技能

思考力・判断力・表現力との関係も示す

大学入試センター（以下、センター）が公表した「試行調査の問題の公表・結果速報」では、正答率以外に、大問ごとの問題のねらい、学習指導要領の内容、主に問いたい資質・能力（知識・技能、思考力・判断力・表現力）、小問の概要なども公表された。＜表2＞は、国語の例である。また資料として、国語では「作問のねらいとする主な『思考力・判断力・表現力』、及びそれらと出題形式との関係についてイメージ（素案）」なども例示されている。

2021年度入試からの大学入学共通テスト開始に向けて、すでに校内の定期テスト等の問題や授業内容の改善を図っている高校もあるが、実際の問題例とともに、これらは高校での検討の参考になるのではないか。

なお、試行調査で出題される問題は、あくまでも検証のためのものであり、今回の問題構成や内容が必ずしもそのまま2021年度入試からの大学入学共通テストに受け継がれるものではない。実際の大学入学共通テストの問題構成や内容等は、今回の試行調査の結果等を踏まえ今後さらに検討される予定だ。

大学入試英語成績提供システム

23の資格・検定試験が参加要件を満たす

民間の英語の資格・検定試験の利用については、2017年7月の「大学入学共通テスト実施方針」において、資格・検定試験のうち、試験内容・実施体制等が入学者選抜に活用する上で必要な水準及び要件を満たしているものをセンターが認定し、その試験結果及びCEFRの段階別成績表示を要請のあった大学に提供することとされていた。その方針に基づき2017年11月に大学入試英語成績提供システム（以下、システム）の参加要件がセンターより示され、資格・検定試験団体からの申し込み受付が始まった。

その後、申し込みのあった試験について参加要件を満たしているか、具体的には、試験とCEFRとの対応関係、

高校学習指導要領との整合性の確認などが行われ、3月下旬に確認結果が公表された＜表3＞。その結果、7つの団体の23の資格・検定試験が参加要件を満たした。

国立大学の2021年度入試以降の入学者選抜に関する基本方針

ところで、英語の民間の資格・検定試験の利用については、国立大学協会（以下、国大協）の方針も気になるところだ。

国大協は2017年11月に「平成32年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針—」を公表した。基本方針の主なポイントは次のとおりである。

- ①全ての国立大学は、「一般選抜」で第一次試験として、原則5教科7科目を課す。
- ②英語は、新テストの枠組みにおける5教科7科目の位置づけとしてセンターが認定した民間の資格・検定試験（以下、認定試験）を「一般選抜」の全受験生に課すとともに、2023年度（2024年度入試）までは、センターの新テストにおいて実施される英語試験を併せて課し、それらの結果を入学者選抜に活用する。
- ③新テストの5教科7科目を課す原則の下、記述式問題を含む国語及び数学を、「一般選抜」の全受験生に課す。
- ④英語の認定試験の試験結果・段階別成績表示の結果、及び国語・数学の記述式問題の段階別成績表示の結果の具体的な活用方法について、国立大学共通のガイドラインを別に定める。
- ⑤個別試験においては、全ての受験生に論理的思考力・判断力・表現力を評価する高度な記述式試験を課す。
- ⑥少なくとも2024年度入試までの間は、試験日程を前期日程と後期日程に分離して設定する。

特に、大学入学共通テストの英語と記述式問題については、④の「別に定める」とされた「ガイドライン」が注目される。2018年2月中旬以降、「民間の資格・検定試験の配点が最大限でも英語全体の1割弱である」といった報道がされていた。国大協の3月上旬の通常総会で「大学入学共通テストの枠組みにおける英語認定試験及び記述式問題の活用に関するガイドライン（案）」について協議を行ったものの、3月末にセンターが公表する民間の資格・検定試験の認定状況等を見定めたうえで最終的な決定・公表を行うこととなった。どのようなガイドラインとなるのか注目される。

＜表3＞大学入試英語成績提供システム参加要件を満たしていることが確認された
資格・検定試験

(アルファベット・50音順)

資格・検定試験実施主体名	資格・検定試験名
Cambridge Assessment English (ケンブリッジ大学英語検定機構)	ケンブリッジ英語検定
	C2 Proficiency
	C1 Advanced
	B2 First for Schools
	B2 First
	B1 Preliminary for Schools
	B1 Preliminary
	A2 Key for Schools A2 Key
Educational Testing Service	TOEFL iBT テスト
IDP : IELTS Australia (*)	International English Language Testing System (IELTS) (対象:「アカデミック・モジュール」)
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	TOEIC® Listening & Reading Test および TOEIC® Speaking & Writing Tests
株式会社ベネッセコーポレーション	GTEC
	Advanced
	Basic
	Core CBT
公益財団法人日本英語検定協会	Test of English for Academic Purposes(TEAP)
	Test of English for Academic Purposes Computer Based Test (TEAP CBT)
	実用英語技能検定 (英検)
	1 級 (対象:「公開会場実施」)
	準1 級 (対象:「公開会場実施」・「1日完結型」)
	2 級 (対象:「公開会場実施」・「1日完結型」・「4技能 CBT」) 準2 級 (対象:「公開会場実施」・「1日完結型」・「4技能 CBT」) 3 級 (対象:「公開会場実施」・「1日完結型」・「4技能 CBT」)
ブリティッシュ・カウンシル	International English Language Testing System (IELTS) (対象:「アカデミック・モジュール」)

(*) IDP : IELTS Australia が実施する International English Language Testing System (IELTS) については、条件付きで、参加要件を満たしていると思えるものと判断した。

・大学入試センター「大学入試英語成績提供システムへの参加申込のあった資格・検定試験に係る参加要件の確認結果について」(2018年3月)

高校生のための学びの基礎診断

「高校生のための学びの基礎診断 (以下、基礎診断)」は、2018年3月中旬に「基礎診断の認定基準・手続等に関する規定」が公表された。主な認定基準としては次のとおりである。

1. 出題

- 学習指導要領を踏まえた出題の基本方針に基づく問題設計
- 対象教科は、国語・数学・英語で共通必修科目を中心。義務教育段階の内容を含む
- 主として知識・技能を問う問題に加え、主として思考力・判断力・表現力等を問う問題の出題

- 記述式問題の出題
- 英語は4技能を測定

2. 結果

- 学習成果や課題が確認でき、事後の学習改善や教師による指導の工夫・充実に資する結果を提供

2018 (平成 30) 年度に認定を受ける基礎診断の測定ツールについては、既に申請受け付けが開始されている。2018年6月末が申請締切で、10～11月頃には審査結果が公表される予定だ。認定された測定ツールについては、申請内容の情報が文部科学省ホームページで公表される。学校や教育委員会は、これらの情報を見て選択・利活用を検討する。2019 (平成 31) 年度から高校等において本格的に利用が開始される予定だ。